

村山民俗学会

第 395 号

発行日 2024 年 9 月 1 日

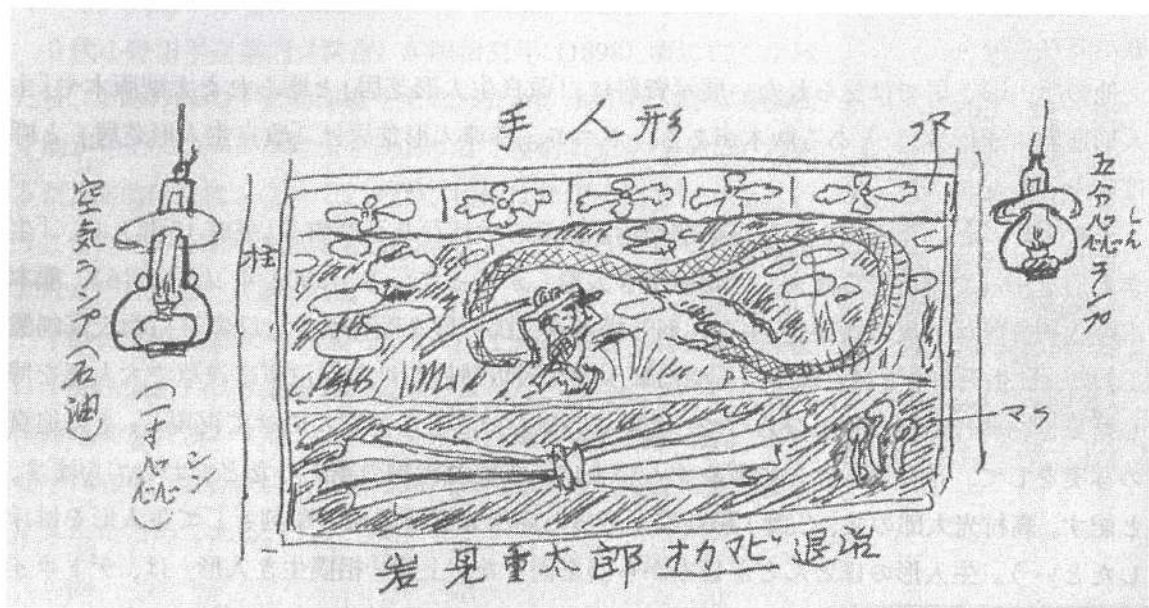
発行責任者 相原 一士

編集担当 岩鼻通明

天童織田の里歴史館（旧東村山郡役所資料館）

企画展「寺津手人形の芝居の世界-受け継がれる伝統芸能-」案内

野口 一雄



平成 22 年（2010）3 月、本会が自筆本『百姓生活百年記』（巻壺 高瀬助次郎著 山形県立博物館所蔵）を活字本に編集、発行した。その中に、上記のような挿絵と、手人形芝居のことが記されている。

「手人形 岩見重太郎オカマビ退治」

旧二月一日か二日の夜には私の所では必ず手人形がかかったのであった。かける家も毎年決まっていた。木戸銭は取らず花であった。家内中が見に行っても花は先づ十銭位な所であった。（明治四十年頃）出し物は人情物が多く、シノダノ白キツネ、アワノトクシマ十郎兵エ、カゲキヨノローヤブリ等様々。勇しい所では岩見十太郎オカマビ退治、又安達原のオニババ等であった。何時も大入り満員で身動も出来なかった。

又この家では、コンニャク、南京豆、駄菓子などを賣っていた。

また、『干布村（現天童市干布）郷土資料 草稿』（昭和 6.7,頃）に、手人形の記事が次のように載る。

蔵増万助、芳賀村（現天童市芳賀）又助などが当地へ来たものだ。彼等は或る家を借りて木戸銭を取る事もあった。さあ手人形が来たとなると村中の老若男女打ち集まり、立錐の余地なき賑やかさであった。